



Fukiya: A red townscape shaped by its mines and red pigments

鉦山とベンガラが築いた赤の町並み「吹屋」 岡山県高梁市

特集 山のマチ、山のムラ
Special Features / Mountain Towns and Villages

パシフィックコンサルタンツ株式会社
松野 奈実 (会誌編集専門委員)
MATSUNO Nami

赤い町並み「吹屋」

岡山県高梁市北西部、標高約500mの山あい位置する吹屋地区は江戸時代から銅鉦山とベンガラ生産によって栄えた集落である。周囲を中国山地の深い山々に囲まれた吹屋地区は国の重要伝統的建造物群保存地区となっており、2020（令和2）年には日本遺産にも認定された。赤銅色の石州瓦、紅を帯びた外壁や格子、漆喰に混ぜられた淡い赤といった統一感ある赤い町並みが広がる光景は、他の地域には見られない独特の景観となっている。なぜ山間地域にこのような統一感のある赤い町並みが広がっているのだろうか。

吹屋銅山の歴史

吹屋地区の発展の基盤は、何世紀にもわたる銅鉦山の歴史にある。古書には807（大同2）年に開坑

したとの記録があるものの、吹屋の銅山として本格的に記されるのは戦国時代以降である。尼子氏と毛利氏の間で銅山の争奪戦が展開され、その後、備中国奉行小堀氏、成羽藩山崎氏の支配を経て、幕府直轄の天領となった。

吹屋銅山の繁栄期は大きく三つに分けられる（表1）。

江戸時代は手掘りかつ坑内の排水が非常に困難であることから鉦区も小規模だったが、泉屋の資本力により坑道内の湧水を排水する大疎水坑道を開

表1 吹屋銅山の繁栄期

	年代	経営	備考
①	天和～元禄	泉屋（住友）	約35年間の経営
②	享保～天保	福岡屋（大塚）	中断を挟み、約100年の長期経営
③	明治～昭和初期	三菱（岩崎）	50年以上にわたる大規模経営

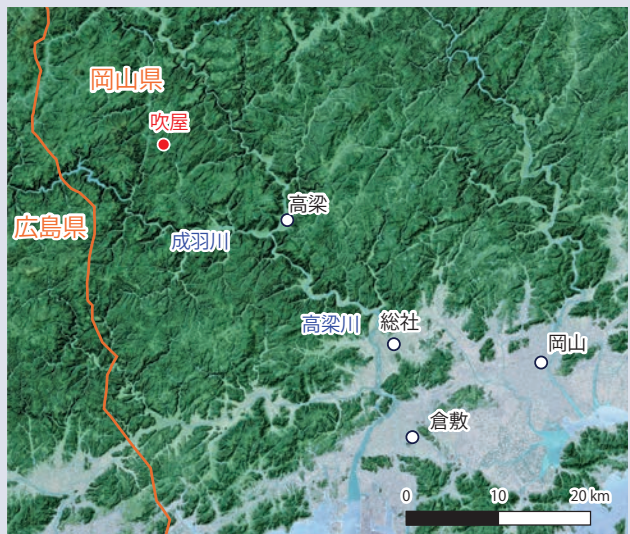


図1 吹屋地区位置図

削するなどして、銅の産出量が増加した。明治期以降は三菱の経営となり、削岩機や自家発電所を導入し、洋式溶鉦炉を設置するなど精錬工程の効率化・近代化を図り、明治後期～大正期には国内有数の銅山に成長した。

ベンガラの製造

銅山の歴史と並行して、吹屋が栄える理由となったのがベンガラの製造である。ベンガラはインドのベンガル地方で産出される黄土（天然酸化鉄）が由来となったと言われている。ベンガラの原料は銅の精錬過程で生じる硫化鉄鉦である。火鉢で焼いた捨石を庭に置いておいたところ、雨の日に周りが赤くなっていることに気づいたことがベンガラ製造の始まりとも言われている。風化した硫化鉄鉦の表面に発生する白いローハという物質を焼くと赤い顔料が発現することを発見し、江戸時代には銅山の捨石の硫化鉄鉦を利用した家内工業的な製造が吹屋で始まった。

その後、人工ローハの製造は、1751（宝暦元）年に本山鉦山で良質な硫化鉄鉦の露頭が発見されたことで始まる。西江家が民間操業で採掘を開始し人工ローハの製造に成功した。その後谷本家、広兼家も経営に参入し、この三家がローハ製造の御三家として繁栄した。御三家は雇用賃金、薪などの買取価格、数量などを取り決め、結束して生産体制を整えた。



写真1 今もトロッコの跡が残る笹畝坑道



写真2 真っ赤に染まったベンガラ製造場

【ローハの製造工程】

① 焼鉦場

鉦山で採掘された硫化鉄鉦をローハ工場へ運び、薪を敷いた上に積み上げ、約30日間焼成する。

② 溶解・濃縮

焼き砕かれた鉦石を水中に溶かし、その水溶液を煮沸して濃縮する。

③ 中和・乾燥

濃縮液を中和させるとローハの結晶となる。

御三家が製造したローハを仕入れ、ベンガラを製造・販売していたのが五家（のちに六家となる）である。地場産業を奨励する早川代官は五家によるベンガラ生産の保護のため、株仲間を結成し五か条の議定書を締結させた。

一、ベンガラ売払い方について、その家に買いに来た買手に、他家の者がベンガラを売るようなことはしない。



写真3 ベンガラの梱包・出荷風景



写真4 石垣で囲われた広兼邸



写真5 ベンガラがもたらした富によって建てられた旧片山家住宅



写真6 旧吹屋小学校

- 二、ベンガラの他国輸送の途中での難船や、商売上の掛け合いで問題が起こったときは、聞きつけ次第、仲間として面倒をみること。
- 三、ベンガラの過剰生産や競売で、不当にベンガラの市場価格を落とさないようにすること。
- 四、ベンガラ製造所が焼失した場合には、仲間として諸道具を持ち寄って助け、本人の営業に支障ないよう手厚く世話すること。
- 五、仲間内に大病人や死人などのあった場合は、たとえ正月元日であっても寄り合い、手厚く面倒をみること。

株仲間の目的は製造販売の安定化と不測の事態への保険であり、仲間意識も醸成した。株仲間で結束し、ローハの仕入れ量やベンガラの価格を統制した結果、吹屋のベンガラ工場は年間約100tものベンガラを生産することに成功した。

この株仲間の構成員には時代によって若干の変化があり、明治初期には片山家、長尾家、東長尾家、仲田家、田村家、広兼家となった。

【ベンガラの製造工程】

① 窯焼

原料のローハを乾燥させ、土器皿に盛って窯に積み、焼成する。焼いたローハに水をかけ円盤状に固め、再び窯で焼成する。焼成したものを粉碎し、篩にかけて粗粒のベンガラとし、さらに器に盛り、三度目の窯焼きをする。こうしてベンガラのもとが出来上がる。

② 水簸

搗臼で細かく粉碎し、階段状の水槽で上澄みを流して不純物を取り除く。

③ 脱酸

沈殿したベンガラを引臼でさらに細かくし水槽に入れる。ベンガラを攪拌し、上澄みの硫酸を捨てる作業を100回ほど繰り返す。

④ 干立場

脱酸後の泥状ベンガラを干し板に流し込み、干し棚に並べて天日で乾燥させる。

⑤ 選別

乾燥したベンガラを台車に集め、篩にかけて粒子を選別する。

⑥ 出荷

箱詰めされたベンガラを問屋に運び、計量・梱包して出荷に備える。

この手間と時間のかかる工程により、吹屋のベンガラは製造された。

良質な硫化鉄鉱石が手に入ることと、質の高いローハの製造技術が高品質のベンガラ製造を支え、1877(明治10)年に開催された「第一回内国勸業博覧会」で吹屋ベンガラは品質優良として入賞した。吹屋ベンガラは品質を等級ごとに分けられ、最高級品は九谷焼や伊万里焼などの陶磁器の絵付けに、次いで漆器の材料に使用され、一般的な品は建築素材に使用された。吹屋のベンガラは、全国の約95%のシェアを占め、東京・名古屋・大阪など全国各地に年間180tも出荷していた。

■ 赤い町並みの形成とベンガラ商人

銅山とベンガラで繁栄した吹屋には赤褐色の石州瓦の屋根、ベンガラ塗りの格子で鮮やかに統一された立派な町屋が軒を連ねている。この町並み形成には、前述した銅山の歴史とベンガラ産業が深く

関連している。

この景観に最も大きく寄与したのはベンガラ商人たちの財力である。

高い品質を誇る吹屋ベンガラは全国へ出荷され、巨額の富をもたらした。ベンガラで得た莫大な財力を背景とし、各商家たちは石見から宮大工や瓦職人を呼び寄せ、競うように様々な工夫を凝らした町屋を建築した。

なぜ石見から宮大工を呼び寄せたかという、それは銅山の歴史による。尼子氏と毛利氏の銅山の争奪戦では尼子氏が勝利し、この時期から島根方面との交流があったからだと考えられる。石見の宮大工を呼んだため、石州瓦が使用され、赤い屋根の町並みとなった。また、ベンガラは防腐・防虫作用があり神社の建造物によく使われるなど、宮大工にとってはよく知られた顔料だった。

そんなベンガラが簡単に手に入ったことも赤い町並みが広がる大きな理由である。ベンガラ商人の家なので、当たり前が高品質のベンガラが大量に手に入った。また吹屋はベンガラ商人の分家・親族が多く、また株仲間内の仲間意識もあり、家屋の造りや色使いが自然と統一される土壌があった。

このベンガラ商人の家々は共通して非常に防犯意識が高い構造となっている。屋内に保管している現金や貴重品、家族の身の安全を守る必要があったからだ。ローハ製造の御三家である広兼家は集落の他の家々よりも高くに位置し、裏山は硬い石を切り崩し容易には侵入できないようになっており、表面は石垣で囲われている。入り口付近には不寝番や門番を配置するほどの警戒体制だった。家屋の中を見ても、1階から寝室がある2階に上がる階段は収納できるようになっており、盗みに対する防犯意識が高かったことが実感できる。また、片山家は外からは2階建てに見えるが、実際は3階建てであったり、隠し扉や隠し部屋があったりと工夫を凝らした構造になっていた。この防犯意識からもベンガラ産業が相当な富をもたらしていたことがうかがえる。

■ 現在の吹屋とこれから

明治中期以降、銅山の閉山やベンガラの需要減退



写真7 吹屋の町並み



写真8 観光スポットにもなっている郵便局

を経て吹屋の経済は徐々に衰退していった。そんな中、他には見ない歴史的な町並みを保存する機運が高まり、1977(昭和52)年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。これを契機に、伝統的建築と町並みの維持が進められ、建造物保存、ベンガラによる外壁修復、電線地中化などの施策が実施された。また、1900(明治33)年に建築され、現存する日本最古の木造校舎である旧吹屋小学校の保存修理工事および観光施設としてのオープンや、笹畝坑道をはじめとする鉱山遺構の保存と公開、空き家を利用した宿泊施設の運営など観光にも力を入れて取り組んでいる。美しい赤い町並みを人々に伝え、未来に残していこうという地域の努力によって、現在も吹屋独自の景観が維持されている。

■ 山間の町に色づく赤

吹屋の赤い町並みは、江戸時代から明治期にかけて発展した銅鉱山とベンガラ生産に根ざすものである。ベンガラ商人の町として、地域資源・技術・社会構造が複合的に作用し、山間という制約の中でも統一的な景観を形成した。

赤は単なる色ではなく、地域の繁栄を映す象徴であり、今も山間の中に美しく広がっている。

<取材協力>
一般社団法人高梁市観光協会 吹屋支部

<参考資料>
1) 成羽町史 通史編
2) 高梁市吹屋―伝統的建造物群保存地区見直し調査― 高梁市教育委員会(2013)
3) 大地の赤ベンガラ異空間 ベンガラの町、吹屋ものがたり「ローハ」が生み出した、極上の赤 / 永峰美佳 著 (2015)
4) 高梁市日本遺産推進協議会 <https://fukiya-japan.red/>
5) 高梁市観光協会 https://takahaskinko.or.jp/modules/spot/index.php?content_id=21

<写真提供>
P22上、写真7 高梁市観光協会
写真1、2 土橋亮太
写真3、5、6 松田明浩
写真4、8 松野奈実